# 第六十九回日本中国学会大会開催報告

山形大学
西上　勝

第六十九回目の本学会大会は、本年10月6日（金）午後の学会理事会を皮切りに、翌7日（土）と8日（日）、山形大学小白川キャンパスを会場に開催されました。大会準備会の代表をつとめた者として、その模様、運営についてご報告させて頂きます。

山形大学に在籍する会員が準備会の中心となって、本学会大会を山形で開催するのは、今回が最初のことでした。大会開催担当の依頼を頂いた時は、任を果たすことができるものか大変不安でした。奈良女子大学で開催された第六十八回大会の閉会式の次期当番校代表挨拶でも、地方国立大の置かれた厳しい情況ゆえの躊躇を口にせずにはすみませんでした。

しかし、結果的には研究発表及び次世代シンポジウムに、のべ450名を超える方々が来場され、7日夕刻に市内ホテルを会場に開催した懇親会にも120余名の方々のご参加を頂きました。これも土田健次郎理事長をはじめ理事の先生方と学会事務局のご指導・ご支援、さらに研究発表、シンポジウムに取り組んで頂いた発表者と司会者の先生方の積極的なご協力あってのことでした。先ず、皆さまに厚く御礼申し上げます。

私ども準備会は、山形大学の人文社会科学部と地域教育文化学部に在籍する会員3名が、渉外を担当とする代表と、経理担当及び大会運営担当、と業務を分担しつつ、できる限りシンプルな運営を目指す方針で準備活動を開始しました。しかし、もちろん3名だけで運営を担いきれるものではありません。大会の開催担当の決断は、他大学に在籍する師友の励ましと援助を得て、はじめて下せたものでしたし、大会当日の運営に当たっても、他大学在籍の先生、指導学生たちやその友人、さらには東北大学文学研究科の院生諸氏、こうした方々の応援を得てはじめて可能でした。

地方国立大の文系学部は、近年の大学のミッション再定義から開始された人文社会系学部と教員養成系学部の継続的な再編の流れの中で、度重なる変革を余儀なくされています。山形大学でも、従来のあり方から大学執行部のトップダウン指導体制に移行し、教授会は独立した機能を喪失しつつあり、教員人事でも年度予算でも大学執行部の意向が重視されるようになりました。こうした動きの中では、本学会を支えるような教育態勢は、山形大学ではほぼ失われつつあります。今回の大会開催担当で、最も心苦しく思われたのは、私どもが置かれたこのような状況でした。今後、このような地方国立大の状況が、かつての状態に復する可能性はかなり乏しいように想像されます、こうした点にもご配慮いただければと存じます。

当番校の業務の中心は、発表者と司会者への連絡調整と来場された会員への対応でした。こうした業務のやりく

山形大学学生サークルによる花笠踊演舞

りについては、前回六十八回大会で準備会代表を務められた野村鮎子先生から懇ろな申し送りを頂き、業務の進め方を予想する上で大変な助けとなりました。初日の受付業務が混乱することはないか、と当初懸念しておりましたが、会員の皆様のご配慮や受付を担当してくれた学部生たちが予想外にしっかりとした受け答えをしてくれたおかげで大過なく進行致しました。ただ、諸会費の当日受領は、混乱の原因ともなりかねませんので、これからは大会要項にも毎度記載のある通り、振替受領証を提示していただくことにより諸会費支払い済みを確認する方法が本学会のマナーとなることを望みます。また発表者の方々には、部門を問わず一律に150部の発表用資料のご準備をお願い致しましたが、一部の方では苦心して準備して下さった資料が、残部大量となる結果となってしまい、準備会としては大変申し訳ない気持ちがしました。発表用資料は欠かせないものではありますが、軽量化が検討されても良いのではと強く感じられました。

前回大会では研究発表以外に、講演会やシンポジウムなど多くの新しい企画が盛り込まれておりました。私どもは、土田理事長から事前に示唆頂いた、次世代シンポジウムの申し込み受付を実施するだけで手一杯で、目新しい企画を進める余裕がありませんでした。ただ、山形大学小白川図書館・附属博物館と連携し、学会に合わせて特別展「山形と沖縄をつないだ琉球漢詩文」を開催できたことは大変な喜びです。多くの学会会員諸氏にも、新たな関心を抱いて頂けたのではないかと存じます。この展示を思いついたきっかけは、前回大会の懇親会の帰途、鹿児島大学の高津孝先生から「山形には琉球文書があるんですよ」とお伺いしたことでした。その後さらに、沖縄県うるま市で進められていた琉球漢詩文調査に関する調査報告書を、高津先生からご提供頂きました。また、附属博物館長をつとめている本学部の新宮学教授に、高津先生が本学図書館の調査にお越しになっていたことを教えて頂き、新宮教授がこれまで関心を持って進めてきた米沢の郷土史家・伊佐早謙の林泉文庫の調査、それと組み合わせた特別展の開催に向けて、検討を進めることにしました。その過程でも、高津先生からは助言を頂戴しましたし、さらに学会開催期間中、二度にわたってギャラリー・トークを進んで担当して下さいました。おかげで多くの会員諸氏が参観され、好評を頂きました。ここで、高津先生に改めて厚く御礼申し上げます。

さて、懇親会開催も準備会の主要な任務の一つです。今回は、石川忠久先生から自作の漢詩をご披露頂いた後、山形大学学生サークルによる山形花笠踊りを、皆様にご鑑賞頂きました。サークル名「四面楚歌」については怪訝の声が上がったものの、大学で一二を争う大所帯のサークルから選抜された学生たちの力のこもった踊りには、暖かい賞賛の拍手を贈って下さり、企画した私どもも大会開催までの準備が報われたような思いがいたしました。ありがとうございました。

高津孝先生のギャラリー・トーク

特別展チラシ